

“すり鉢のまち” 長崎の下水道

長崎の下水道は昭和 27 年に着工されてからずっと「分流式」。土地柄からも大規模な処理場用地が得られなかったこと、水道水源の上流域での開発が進んだこと等による理由からだろうか。お陰で中華街からの油脂もオイルボールを形成せず、“合流式下水道の改善”をよそに、「先見の明があった?」。地形の特殊性から下水処理場が 9 か所、ポンプ場は実に 18 か所（汚水 16、雨水 2）。坂道ばかりで道幅も狭く、昔は資材を馬で運んでいたという。これを逆手にとって長崎市下水道部では、分散型のメリットを生かした危機管理面でのリスク削減を目指している。処理場間のネットワーク化は改築工事を進める上でも役立つという。7 町合併後の下水道普及率は 85.1%（旧市内だと 89.6%）。これからは従来の民間委託を一步進めた「包括的民間委託」にシフトしていく。



長崎市中部処理場

“出島”の復元と中島川

誰もが知っている、海に突き出した扇形の優美な出島は、今や跡形もない。明治の港湾改良工事で市街地に埋没してしまったからだ。その“完全復元”を謳った長期復元計画があるという。しかしその実現は至難の業とか。そのためには中島川の流路変更や国道の路線変更といった大がかりな都市改造計画が必要になるからだ。また、出島の完全復元に不可欠な“出島絵図”だが、これが夫々まちまちで、どれが真実の姿なの学術的にも決め難いのだという。上述の「よみがえる・出島」は短中期計画で復元したものだが、長期復元となると大変なことになる。しかし「長崎の歴史的市街地を再現して、ゆくゆくは“世界遺産”に登録したい」という観光都市・長崎ならでの願いもあるという。ということは「中島川の水辺空間が世界遺産になる」ということであり、中島川も清流のコイやアユだけの話ではなくなるのだ。



眼鏡橋